

美術大学の学生だった私は、卒業するとき、どこかの会社に就職することがイメージできず、好きなグラフィックデザイナーに弟子入りしたいと考えた。作品をまとめたブックを作り事務所に連絡すると、アシスタントがブックを預かってくれることになった。港区のマンションの一室が事務所になっており、扉が開くと玄関スペースがなく、すぐに絨毯になっておりそこに靴が揃えてあった。アシスタントは背の高い男性で裸足で現れた。この事務所に採用されたら私もこの男性と同じ部屋で裸足で過ごすのかと考えた。デザイナー本人も裸足のだろうか。その世界はとても遠いところのように思われた。毛足の長い高級な絨毯がすべての音を吸ったその静寂は大人の世界に思われ、玄関先でものすごく緊張したことを覚えてる。

何日かして、アシスタントから連絡があり、再び事務所に行ったら「残念ですが」とブックの返却とともに採用を断られた。あまり覚えていないのだが、そのまま帰宅した。ためだった理由も聞かなかった。ショックでその頃の詳細や機微をあまり覚えていない。

そのすぐあと、わたしは夜の社交場で、そこで知り合った美術専門学校に通う同年の女性とその夜限りの友情を結び、その場限りの会話をしていた。学んでいる世界も同じ、同い歳の彼女と「この春の就職をどうするか」という話題になったとき、その子が、自分の父親がデザイン関係で、父の縁故で決められた勤め先があるけれど乗り気ではない、と話し出した。そこは個人のデザイン事務所で、そのデザイナーのことをよく知らないのです、と言い、私がブックを持って行ったデザイナーの名前を出した。「知ってる？」

私は息が止まる程ビククリしてしまった。多分顔が紅潮したと思う。私が社会の不条理と不公平に愕然とした初めてのあからさまな出来事だったと思う。良くも悪くもそのとき私は心の中で一瞬にして、一皮かぶってむけて汚れて怒って泣いて笑って大人になった瞬間だったと思う。

神がいるなら、神はなにを思い、彼女と私にそんな会話をさせたのだろうか。

私は彼女に、その事務所のデザイナーがどんなに凄くて、私は大好きで尊敬していること、そして実はわたしはそこに就職したくてブックを持って事務所にアタックして断られたことを話した。「いいな、凄く羨ましい」と言った。「絶対に入った方がいいよ」とも言ったと思う。黙っている方が恥ずかしいとそのときは思った。恥ずかしくてわたしは黙っていられなかったのである。

話しはそれでおわり。今でもそのデザイナーは世界的に有名で今の私にはさらに遠過ぎる人となった。あとで、彼女は自慢のつもりでわざと言ったのかもしれないと思ったこともあったが、あのときはつゆ程もそう思わなかった。もしかして彼女もわたしと同じく、黙っている方が恥ずかしいと思っけて口に出したのかもしれない。仮にそうだったとしても今となってはどうでもいいことだ。

今日その人の展覧会に行った。活動の軌跡を辿る大きな企画展が開催されているのだ。若かりし自分がこの人の事務所に一人、募集もないのにブックを持って伺った一件は、色々な思いでいつもは頭の奥底に仕舞っている。